

骨や歯を以て如何に絶滅した型を再現して比較研究に資し、人類發展の経過を証明するかに就いて平明に解説する。かくて、はじめて靈長目に關する問題をとりあげる。ホモサピエンスに到達する迄のさまざまな段階と傍系をあとづけ、各種の化石人類と化石猿類に就いて詳しく述べる。「アフリカ発見のオーストラピテクス」に關する一節、「洪積期とホモサピエンスの起源」と題する文章は特に興味深い。人類進歩の全史は、すべて頭腦の素晴らしい發展に負う。人類の頭腦は他の動物群を尻目に急速に而も複雑に發達しそれが人体の、他の部分を精妙なものとする結果を生み、すべての動物群を圧倒したのである。著者はこの経過を指摘すると共に、最後に人類は彼の頭腦の發達に進歩のエネルギーを集中したからこそ、他の動物群に智能の上で優越し得たのだから、今や人類互の間に秩序を保つて生活してゆくことを保証せねばならぬと強調する。若しこの事に失敗したら、他の動物が或る特定の身体的メカニズムが膨大な發達をとげながらそれによつて亡びてしまつた多くの例が示す如くに、人類もまた絶滅する

だろうと云う意味の警告を以て結尾としてゐる。卷末に參考すべき文獻目録を添へているから、更に専門の研究に入らうとする者にとつて好個の指針となる。同じシリーズの Dr. K. P. Oakley 著 *Man the Tool-Maker* と併せ読むことを奨めたい。(一二二頁 55c)

Frederick Johnson

: Radiocarbon Dating (1951)

アメリカ考古学協会 (Society for American Archeology) 紀要第八冊である。此の冊子は放射性炭素 (C<sup>14</sup>) による年代測定法に関心を持つすべての考古学者、地質学者、植物学者にとつて、必携の文獻である。植物も動物も共に生命のある限り大氣中から二酸化炭素を吸収しつづつ通常の炭素に対し恒に同じ比率の放射性炭素を含有している。地球上の動植物はすべて一方では体内の組織中の放射性炭素を恒に解消しつづけていると同時に他方では新しい放射性炭素を大氣中から摂取するからである。この更新は組織が生きている限り継続するが、一旦生命が絶えると大

氣中の炭素の吸収はとまり、自然分解に因つて放射性炭素の分量は漸次減退する。その放射性炭素減退の速度は、どこでも、いかなる生物でも一定しているのも、もと生物であつた遺物に残っている放射性炭素の量を計測すれば、該遺物の素材であつたものと生物が、何年前に生命が絶えたかを知ることが出来る。これがこの年代法の基礎の理論である。実際には量を測るのでなくて、分解の速度を測るのであつて、計測は却々困難であるが、精緻な実験操作によつて成功している。

本書の序文において編者 Frederick Johnson 博士は、この年代法の發達をあとづける。そして計算の結果疑わしい年数が出ても、その殆んどすべては、実験室での過誤ではなくて、資料出土の地点における考古学者や地質学者の不正確な觀察に由来することを指摘し特に他の遺物や地質学的堆積物との層序的關係を明確にする事を要求している。当然のこと乍ら注意せねばならぬ点である。

次に本書には二百点以上の資料に就いてこの年代法を案出した W. F. Libby 博士等による計測の結果の発表が載せてある。博士は

カゴ大学原子核研究所内に特別の装置を持つ実験室を設けて一九四九年以来計測に従事した。計測に用いた標本は大多数が合衆国内から提供されたものであるが、英、仏、独、丁、株、トルコ、エジプト、イラン、西アフリカ、日本、メキシコ、カナダ、アラスカ其他から送られた重要なものが少くない。そして各項毎に簡単な記述があつて、標本の出所、順序関係、既存の年代標等を明示してある。

以上の表に続いて、夫々の権威者による専門分野の放射性炭素年代に関する批判が簡草に記してあるのは、頗る有益である。F. H. H. Roberts の「アメリカ最古の人類」W. S. Wash の「合衆国南東地区」H. de Terra の「フランスのラスカ洞窟」R. J. Brindwood 其他の「近東並に中東地方」J. Bird の「南米」等の諸編がある。また最近二万五千年の地質学的堆積に対する年代測につき R. F. Flint が、ホーレン年代法に対する放射性炭素年代の關係につき E. S. Deevey が夫々議論を開展している。そして是等諸学者の合評を以て總括とする。

附載の文獻中には、物理学専門雑誌の名も

挙つてゐるから、技術上のことを知ろうとする際に充分役に立つ。

今やこの年代法は実験の域を過ぎて、年代の分らない遺物に正確な年数を与える段階に來ている事は疑いない。而も未だ資料の汚染に対する処置の如き、根本的な問題が解決されていないので、考古学、地質学、植物学の専門家との間に慎重な忍耐強い協力が必要だと思ふ。そう云う将来の問題に就いても、本書は正しい示唆を与えてくれる。

なほ本法の創始者 Willard F. Libby 博士も同じ標題の単行本 Radicarbon Dating を University of Chicago Press から 1952 年出版(価 \$3.50)した事を附言する。(六五頁 価 \$1.50) — 有光教 —

Max. Sorre : Les Fondements de la Géographie Humaine.

Tome I. Les Fondements Biologiques (1948).  
Tome II. Les Fondements Techniques (1948~1950).

一九四三年から一九五二年にかけて、ソル

ボンヌ大学教授 マクシミリアン・ソルは驚歎すべき労作をこの世に送つた。題して「人文地理学の基礎」であり、全四冊、二千頁よりなる三部作「第一巻「生物学的基礎」、第二巻「技術的基礎」、第三巻「居住地及び一般的地論」である。

この書を取上げて取上げた所以は、すでにわが国の地理学界にも辻村太郎博士や木内信藏博士によつて紹介されただけではなく、知る限りにおいて Geographical Journal や Geographical Review や Annales de Géographie にもかなりの数の論評が寄せられておりこの書が広く世界の地理学界に多くの問題を提起し、センセシヨナルな興奮を盛り上げて行つた事情によつて、多大の興味と共感を呼びおこされるに至つた為である。しかしながら正直なところ、この膨大な書の批判には多くの時日を要することであらうし、ましてや評者自身の学問の経験や語学的才能を以つてしては容易の業ではない。ただ遺憾ながらこの労作を前にしてあまりにもみじめな自己の学問内容をひたすら恥するばかりであり、書評というよりも拙撰な紹介に終るであ